法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

# <研究ノート>神奈川県における清酒製造業の現状と展望

折原, 利泰 / ORIHARA, Toshiyasu

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
43
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
72
(発行年 / Year)
2011-03-22
(URL)
https://doi.org/10.15002/00024756

法政地理
J. Geogr. Soc. Hosei Univ.
43, 61-72 (2011. 3)

# 神奈川県における清酒製造業の現状と展望

折原 利泰

これまでにも数多くの清酒製造業の研究がなされてきたが，従来の研究は一部の地方における酒造産地についての研究であり，巨大酒造産地として生産量が全国でも多い地域の研究や，酒造労働者に関する研究が中心になっている．従来の研究では小規模産地の実態と試みは明らかにされておらず，また清酒消費量の多い大都市地域における清酒製造業の研究はほとんどなされていない．そこで本論文は，神奈川県に着目し，聞き取り調査にてその実態を明らかにしたうえで，消費量が多い地域における清酒製造業の問題点や独自の試み，今後の方向性を考察した．その結果，神奈川県ならではの問題点，および小規模産地ならではの試みが明らかになった．

キーワード：神奈川県，清酒製造業，小規模産地，杜氏
Keywords ：Kanagawa Prefecture, sake manufacturing, small-scalehome, sake brewer

## I はじめに

日本で最も歴史のあるお酒である清酒は，日本の代表的なアルコール飲料といえる．近年では日本国内ばかりではなく海外でも「sake」として消費され始めたが，ビールやワイン，ウイスキーといった洋酒の登場，清酒製造業者の後継者不足，若者のアルコール離れ，焼酎ブームなど様々な要因で日本国内での清酒の消費低迷が続いている．また，1992年の日本酒級別制度の改正[1)]や1998年の規制緩和推進３カ年計画[2)]により，酒類販売の規制緩和が段階的におこなわれ，流通や小売の状況が変わり，清酒製造業の取り巻く環境が大きく変化してきた．

これまでも清酒製造業について数多く研究されてきた．清酒産地の研究として灘，伏見といった有名産地以外では，工藤・大嶽(1993，p69)は「新潟県の清酒製造業は全国的に高い評価をうけているものの，明らかにされていない部分が多く，清酒製造業に関する従来の研究も，必ずしも充分であるとは言いがたい」とし，新潟県上越地方における清酒製造業の実態を明らかにした．山本(1983)は清酒製造業を「近代必要工業」ととらえ，埼玉県における清酒製造業の実態を全国的な視点から分析，考察した．また，吉田(1992)は三重県，西村(2008)は岡山県，杉本(2003)，金尾(2007)は高知県，高村(2002)は青森県と，それぞれ各県における清酒製造業を研究した．

一方で，清水(1985)は中小企業における経営戦略の研究において，清酒製造業を「典型的な伝統産業」とし，清酒製造業における経営の特質を明らかにした．藤原(1999)や柚木(1998)も清酒製造業についての経済，経営の歴史を明らかにしている．

また，清酒製造業の特徴である季節労働者の杜氏集団について木原(2002，p240)は，外部労働者である杜氏集団に依存している清酒製造業を，「酒造要員不足という環境に適応すべく，資本集約化ないし資本装備率の高度化を目指し機械化と省力化を図りつつ，労働の内部化を実現しうる企業と，そのような環境変化への対応ができない小規模企業の間の生産効率性の格差が顕著になりつつある」として，関東甲信越地域における清酒製造業の雇用構造の変化と生産効率性について明らかにした．さらに，松田(1978, 1981)や桜井(1980)が杜氏集団に関する研究をおこなっており，清酒製造業に関する研究では必ずといっていいほど触れられる部分である．

これら従来の研究は一部の地方における酒造産地についての研究であり，巨大酒造産地として生

産量が全国でも多い地域の研究や，酒造労働者に関する研究が中心になっている．しかし，全国には2006酒造年度(以後，酒造年度をB.Y.と略記する)では，鹿児島県を除く46都道府県に清酒業者が存在しており，従来の研究での一部地域だけでなく，全国各地の清酒製造業の解明が必要である．また，従来の研究では小規模産地の実態と試みは明らかにされておらず，また清酒消費量の多い大都市地域における清酒製造業の研究はほとんどなされていない．よって，本稿では清酒の消費量が全国でも３番目に高い35,444kl（2007年度)を消費し，また製成数量では全国で２番目に少ない989kl（2006B.Y.)の神奈川県に着目し，その実態を明らかにしたうえで消費量が多い地域における清酒製造業の問題点や独自の試み，今後の方向性を考察していく．

## Ⅱ　研究方法

本稿研究では，神奈川県における清酒製造業をおこなう企業に聞き取り調査をおこなった．神奈川県内には清酒製造業者が15社(2009年現在)あるが，そのうちの12社に聞き取り調査をおこなった[3]．聞き取り調査期間は2009年８月から10月にかけておこなった．また，神奈川県内の小売店５店舗から，神奈川県の清酒に関係する聞き取りをおこなった．また，日本酒造組合中央会には，現在の蔵人の人数や年齢を知るための聞き取りをおこなった．

なお，現在の清酒業界を把握するにあたり，主として国税庁資料を活用したため，各都道府県別清酒製造業者に関わる資料が2006B.Y.までしかない．酒類全般の資料も2007B.Y.までである[4]．

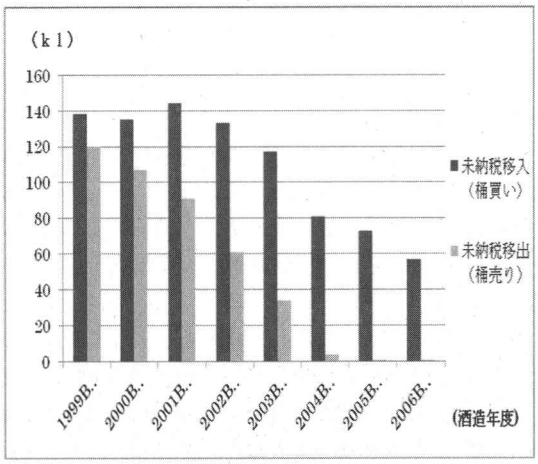
## Ⅲ　神奈川県における清酒製造業の現状

### １．神奈川県における清酒製造業の変遷

神奈川県内における清酒の歴史については瀬戸(1977)の先行研究がある.瀬戸によると，県内の清酒製造の起源は明らかになっていないが，現在の基盤は江戸初期に徐々に出来てきたとしている．その背景として小田原藩の影響が大きく，神奈川県の清酒を支えてきた存在であるとしていて，今日の県内の清酒製造業の基盤を造ったといえる．その功績は現在でも残っており，NK酒造は当時の小田原藩の藩主である大久保氏[5]より賜った銘柄を販売している[6]．

1879（明治12)年における神奈川県の業者数は1,073を数えており，1892（明治15)年には278業者まで減少した．1892（明治15)年の製成数量は6,031klで，小規模な酒蔵が多かったことが推測できる．当時の産地の中心は現在と同じく県西部および県北部であった(神奈川県県民部県史編集室1981)．1918（大正７)年の業者数は204業者であったが，その後は戦争や関東大震災の影響があり，1924（大正11)年には79業者まで減少した(神奈川県県民部県史編集室1983)．その後は企業整備のなかで衰退していき，神奈川県の清酒製造業は2009年現在15社である[7]．

次に，近年の神奈川県の清酒製造業の変容を国税庁が調査をおこなった資料からみていく．第１図は神奈川県における未納税移出入数量の推移を示しているが，これをみると2004B.Y.にいわゆる桶売りをおこなう企業がほとんど無くなり，桶買いの数量も年々減少していることがわかる．これらの傾向から，神奈川県の清酒製造業者は2004B.

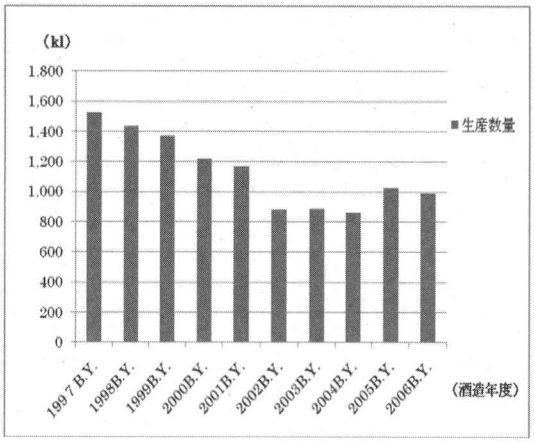



**第１図**　神奈川県における未納税移出入数量の推移
(資料：国税庁より筆者作成)

Y.以降，一部分では桶買いをしつつも，そのほとんどは自社製造による清酒造りの酒蔵になっていることがわかる．

第２図は1997B.Y.以降の製成数量の推移をみたものである．それによると県下の製成数量は2002B.Y.までは減少しているが，2003B.Y.に減少傾向に歯止めがかかり，３klとわずかではあるが増加している．この年は２社が製造をしていないが，集約製造参加者が前年より２社増えていることが影響していると推測される.2004B.Y.は再び減少したものの，2005B.Y.には３年ぶりに生産量が1,000klを超える増加を示し，2006B.Y.は989klとわずかに減少したものの，よく踏みとどまっている．わが国の清酒業界が全体として衰退傾向から抜けだせない状況にある中で，こうした神奈川県の動向は注目すべきものといえよう．

その際，注目されるのが以下の点である．これまでみてきたように，神奈川県の清酒製造業者は全体として零細企業である．しかし，第１表から明らかなように，注目されるのが県内での販売量の多さである（第１表）.過去10年において常に90%以上を県内に販売しており，ほとんど県外に販売されていない．ここで推測されるのが，横浜市や川崎市，相模原市といった複数の政令指定都市を有する神奈川県の人口規模の大きさである．これらの地域の市場規模が格段に大きく，もともと製造量の小さな県内清酒製造業者による製造量が県内だけで消費されてしまい，県外への市場を持たないという特徴が存在する．そして，そうした地元酒に対して，一定規模のファンがつき，県内の清酒製造業者を支えていることが予想される．




**第２図**　神奈川県における生産数量の推移
（資料：国税庁より筆者作成）

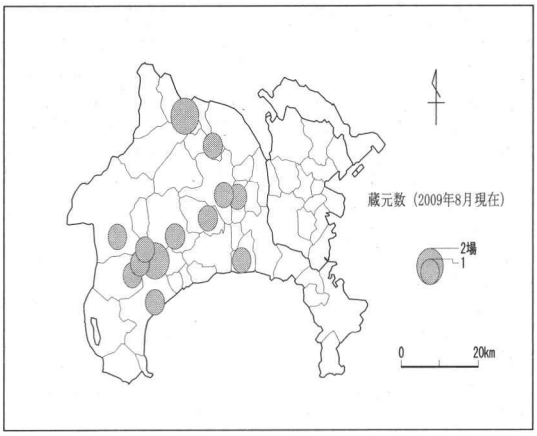
## ２．立地

つぎに，神奈川県下における清酒製造業者の立地と企業の歴史をみていく．特に立地に関しては清酒製造に大きく影響を及ぼし，環境次第では良い清酒を造ることができないといっても過言ではない．

**第１表**　神奈川県における販売先別課税移出数量の推移

| | 業態別 | | | 課税移出数量合計 | 地域別 | | | 業態別割合 | | | 地域別割合 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 卸売業者 | 小売業者 | 消費者 | | 自県 | 自局 | 他局 | 卸売業者 | 小売業者 | 消費者 | 自県 | 自局 | 他局 |
| 1997B.Y. | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × |
| 1998B.Y. | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × |
| 1999B.Y. | 688 | 934 | 171 | 1,793 | 1,629 | 156 | 8 | 38.4 | 52.1 | 9.5 | 90.9 | 8.7 | 0.4 |
| 2000B.Y. | 600 | 899 | 169 | 1,668 | 1,620 | 35 | 13 | 36.0 | 53.9 | 10.1 | 97.1 | 2.1 | 0.8 |
| 2001B.Y. | 544 | 866 | 176 | 1,586 | 1,490 | 83 | 13 | 34.3 | 54.6 | 11.1 | 93.9 | 5.2 | 0.8 |
| 2002B.Y. | 526 | 816 | 175 | 1,517 | 1,469 | 39 | 9 | 34.7 | 53.8 | 11.5 | 96.8 | 2.6 | 0.6 |
| 2003B.Y. | 402 | 747 | 151 | 1,300 | 1,228 | 39 | 33 | 30.9 | 57.5 | 11.6 | 94.5 | 3.0 | 2.5 |
| 2004B.Y. | 336 | 625 | 150 | 1,111 | 1,041 | 44 | 26 | 30.2 | 56.3 | 13.5 | 93.7 | 4.0 | 2.3 |
| 2005B.Y. | 385 | 754 | 217 | 1,356 | 1,242 | 75 | 39 | 28.4 | 55.6 | 16.0 | 91.6 | 5.5 | 2.9 |
| 2006B.Y. | 386 | 692 | 193 | 1,271 | 1,144 | 93 | 34 | 30.4 | 54.4 | 15.2 | 90.0 | 7.3 | 2.7 |
| 単位 | kl | kl | kl | kl | kl | kl | kl | % | % | % | % | % | % |

（資料：国税庁より筆者作成）




**第３図**　神奈川県における清酒製造業者の立地
（資料：聞き取り調査により筆者作成）

2009年現在の神奈川県における清酒製造業者に立地と創業の歴史をまとめたのが第２表である．第2表によると，現在の神奈川県における清酒製造業者の所在地は津久井郡に２社，愛甲郡に１社，海老名市に１社，厚木市に１社，伊勢原市に１社，足柄上郡に５社，秦野市に１社，茅ヶ崎市に１社，小田原市に１社，南足柄市に１社である．

これら製造業者の立地は川崎市や横浜市といった中心都市や人口集積地ではなく，神奈川県内の西部地方に集中していることを示している．また，これらの立地を詳しく見ていくと，津久井郡や愛甲郡に立地するKB酒造，S酒造，O酒造の３社は，相模川や中津川に近く，丹沢山地の山々に囲まれた山間部に立地している．足柄上郡におけるIS醸造，IN酒造，NK酒造，KW酒造，ST酒造の５社は酒匂川をなぞるように丹沢山系の山々と箱根山の山沿いに立地しており，小田原市のAI酒造も同じような立地条件にある．南足柄市のMS酒造は箱根山の入口に構えており，秦野市，海老名市，厚木市，伊勢原市，茅ヶ崎市のKN酒造，Ｉ酒造，KG酒造，KK醸造，KM酒造は市街地から離れた農村部に立地している．また，Ｉ酒造，KM酒造は相模川系の河川沿いに立地している．

これらの神奈川県内における清酒製造業の立地の特徴は大きく分けて３つある．１つは市街地には立地しておらず，山間部や農村部で営業をしていること，２つめは，丹沢山系の山々を囲むように立地していること，３つめに酒匂川，相模川の河川沿いに立地していることである．

このような特徴は清酒造りに関して大きな意味をもつ．清酒の原料は水と米であり，これら原料の確保が必要不可欠である．そのため元々清酒製造業者は農村部に立地することが多い．また，清酒造りには自然の環境も重要な要素であり，市街地では車の排気ガスや工場の煙などによる大気汚

**第２表**　神奈川県における清酒製造業者の立地と創業の歴史

| 企業名 | 所在地 | 立地 | 創業時期 | 創業者 | 創業地 | 企業形態 | 専業・兼業 | 創業の経緯 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| KB 酒造 | 津久井郡 | 山間部 | 1844 | 地主 | 当地 | 株式 | 兼業（焼酎） | 依知で蚕，しょうゆ，酒，呉服等の販売から1844，当地にて専業の酒造り |
| S 酒造 | 津久井郡 | 山間部 | 1751 | 地主 | 相原 | 株式 | 専業 | 不明 |
| O 酒造 | 愛甲郡 | 山間部 | 1830 | 地主 | 当地 | 株式 | 専業 | 武家の家系で，米が余るため米の付加価値をつけるために |
| I 酒造 | 海老名市 | 農村部 | 1857 | 地主 | 当地 | 株式 | 兼業（保険，今年から味噌） | 米の付加価値のため |
| KG 酒造 | 厚木市 | 農村部 | 1818 | 地主 | 当地 | 株式 | 兼業（不動産，レストラン，酒類） | 地主が創業，米の付加価値のため |
| KK 醸造 | 伊勢原市 | 農村部 | 1912 | 地主 | 当地 | 株式 | 専業 | 横浜にて煙草屋を創業，その後当地で酒造業 |
| IS 醸造 | 足柄上郡大井町 | 農村部 | 1870 | 地主 | 当地 | 株式 | 兼業（梅酒） | 米の付加価値のため |
| IN 酒造 | 足柄上郡大井町 | 農村部 | 1789 | 地主 | 当地 | 株式 | 専業 | 農業以外の商売のため |
| NK 酒造 | 足柄上郡松田町 | 農村部 | 1825 | 地主 | 当地 | 株式 | 専業 | 米の付加価値のため |
| KW 酒造 | 足柄上郡山北町 | 農村部 | 1897 | 地主 | 当地 | 合資 | 専業 | 居抜きで酒蔵を買う |
| ST 酒造 | 足柄上郡開成町 | × | 1865 | × | × | × | × | × |
| KN 酒造 | 秦野市 | 農村部 | 1868 | 地主 | 秦野市元町 | 有限 | 兼業（不動産） | 地主が創業，米が余るため 20 年前に当地に． |
| KM 酒造 | 茅ヶ崎市 | 農村部 | 1872 | 地主 | 当地 | 株式 | 兼業（レストラン，ビール） | 地主が創業（農家），米の付加価値 |
| AI 酒造 | 小田原市 | × | 1889 | × | × | × | × | × |
| MS 酒造 | 南足柄市 | × | 1870 | × | × | × | × | × |

（資料：聞き取り調査により筆者作成）

染が清酒造りの環境に適さないため，農村部や山間地のような場所のほうが適している．聞き取り調査でS酒造では「昔に比べて車が朝から通るようになったから，朝の仕込みを早くしなければならなくなった」というように，環境が大きく変わってしまってはいるが，市街地よりかはいくらか良いだろう．また，山々の存在は清酒造りには欠かせない水の問題に関係しており，神奈川県では丹沢山系や箱根山を有し，これらの山々を源とする相模川や酒匂川からの豊かな伏流水を利用できる．そして，相模川や酒匂川という大きな河川があることは清酒業の発展に大いに役に立ち，舟での清酒や原材料の移動が出来るからである．

このように，神奈川県の清酒製造業はその環境において発展するにあたる好条件をもっていた．また創業地から転地した企業はS酒造とKN酒造の２社あり，S酒造は相原からの転地理由として水が確保できなかったこと，近隣の酒蔵との摩擦としていて，KN酒造は20年前に市内での転地をおこない，その理由として周辺の環境が多く変わったことをあげている．このように現在も存在する清酒製造業者は好条件に有する環境をもとに設立しているといえる．

## ３．創業の歴史と現在の経営形態

次に創業の歴史を見ていくと，江戸時代に創業したのが８社，明治時代に創業したのが６社であり，大正時代では1912年（大正元年）創業のKK醸造１社である（第２表）．なお，もっとも古い創業者は津久井郡のS酒造で，1751年（宝暦元年）の創業から250年の歴史を歩んでいる．また，1789年（寛政元年）の創業であるIN酒造も200年を超えての営業をおこなっている．

つぎに創業者についてみていく．聞き取り調査をおこなった企業の12社すべての創業者は地主である（第２表）[8]．また，創業の経緯では小作米として集められた米や，農業をおこなっていて余った米に付加価値をつけるため清酒にして売るという経緯が多い．その他の創業の経緯では，KB酒造はもともと他の土地で商売をしていたが，当地に移り専業の清酒造りをおこなうようになったというものもあった．いっぽう，KK醸造は横浜にて協同で煙草屋を営業していたが，廃業し伊勢原市内の酒造で修業を積んだ後に創業した.KW酒造はもともとあった酒蔵を居抜き[9]で買い，清酒製造業を始めている．

なお，現在の経営状態としては清酒販売以外の事業もおこなっている清酒製造業者が多い（第２表）．例えばKB酒造は焼酎，IS醸造は梅酒の製造もおこなっている.また，Ｉ酒造では保険の営業を兼ねており，2009年からは味噌なども造り始めた．KN酒造は不動産事業もおこなっており，KG酒造，KM酒造は地ビールの製造やレストランの営業をおこなっている．なお，専業としておこなっている企業はS酒造，O酒造，KK醸造，IN酒造，NK酒造，KW酒造の６社である．

## ４．原料水と原料米

現在，神奈川県下の清酒製造業者の清酒造りに使われる原材料を第３表に示した．原料水については，聞き取り調査をおこなった12社すべてが丹沢山系の伏流水を使っている[10]．なお，聞き取り調査をおこなった12社すべてが井戸から水を汲み上げて清酒造りに使用しており，別の地域から水を求めて運搬している企業はなく，水質の悪化はあまりないようだ．

もともと神奈川県の水には定評があり，特に丹沢山系の水は江戸時代の横浜開港による外国との貿易がおこなわれるようになった際に，寄港する船は丹沢山系の水を補給していった（各酒造からの聞き取り）．「町の水道水はほとんど井戸から汲み上げている」[11]（NK酒造）ということも，いかに丹沢山系の伏流水が優れているかがわかる．また，「水の硬度は５度」（KW酒造）というように，現在の神奈川県の各清酒製造業者が使用している丹沢山系の伏流水の硬度は中硬水である（各酒造から聞き取り）．これらの理由などにより，神奈川県の各清酒製造業者は水には大きな自信をもっており，「全国でも水質は負けていない」という発言を各酒造から聞いた．

また，神奈川県において清酒製造に使用される酒造好適米は主に他県から調達している．

第３表　神奈川県における清酒製造業者の原料水と原料米

| 企業名 | 原料水 | 原料米 |
|---|---|---|
| KB 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 美山錦・山田錦・雄町・コシヒカリ |
| S 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 美山錦・山田錦 |
| O 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 山田錦・彗星・美山錦 |
| I 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 山田錦・雄町・亀の尾・神力 |
| KG 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 山田錦・美山錦・キヌヒカリ・雄町 |
| KK 醸造 | 井戸（丹沢山系） | 美山錦・山田錦・五百万石 |
| IS 醸造 | 井戸（丹沢山系） | 山田錦・美山錦・あけぼの・雄町 |
| IN 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 山田錦・美山錦・五百万石・若水・美山錦 |
| NK 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 若水・コトヒメ・山田錦・雄町・五百万石・美山錦 |
| KW 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 若水・播州山田錦・美山錦・五百万石・雄町 |
| KN 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 山田錦・五百万五・若水・舞姫 |
| KM 酒造 | 井戸（丹沢山系） | 山田錦・五百万五・雄町 |

（資料：聞き取り調査により筆者作成）

そのなかでも山田錦，美山錦を使用する割合が高く，ついで雄町，五百万石が使われている（第３表）．また，各清酒製造業者はこれらの原料米の産地にこだわりをもっており，その酒造好適米が生まれた産地から調達していることが聞き取り調査で明らかになった．

いっぽうで，県内で栽培されている酒造好適米もあり，KW酒造では1992年から若水の栽培を足柄地域にて本格化している．しかし，聞き取り調査の中で明らかになったのは，神奈川県産の若水を使用している清酒製造業者はIN酒造，NK酒造，KW酒造の足柄上郡の３社とKM酒造の４社だけであった．またこれらとは別にＩ酒造が完全自社栽培の酒造好適米を使用していることは注目される．山田錦，雄町，亀の尾，神力を中心に栽培しており，山田錦，雄町は主に海老名市，亀の尾，神力は主に座間市で栽培をしている．

以上みてきたように，神奈川県における各清酒製造業者は原料米にこだわりをもつなかで，県産の酒造好適米にこだわらず自社の製造に適した原料米を選択している傾向にある．

## ５．酒造労働者の傾向

第４表は神奈川県における各清酒製造業者に，従業員について聞き取り調査をおこなった結果である．ここで注目したいのが蔵人の項目である．杜氏集団の減少や高齢化が目立つ近年において，蔵人の確保は清酒製造業にとっては死活問題であるが，神奈川県の現状はどうであろうか．

まず，神奈川県における蔵人の傾向として伝統的に越後杜氏集団で形成されていた．聞き取り調査をおこなった12社中，蔵人を呼んだことのないKM酒造以外の11社中８社が越後杜氏集団を呼んでおり，残りのKB酒造，O酒造，Ｉ酒造の３社が南部杜氏集団を呼んでいた[12]．もっとも現在，越後杜氏集団を呼んでいる企業はKK醸造，KN酒造の２社に留まっており，いっぽう南部杜氏集団を呼んでいるのがS酒造，Ｉ酒造，IS醸造，NK酒造，KW酒造の５社である．さらに2005年まで南部杜氏集団を呼んでいたKB酒造と，2007年まで呼んでいたIN酒造の２社あることから，近年は南部杜氏集団に支えられてきたことが明らかになった．また，越後杜氏集団から南部杜氏集団へ蔵人を変えたIS醸造，NK酒造，KW酒造は約10年前からであり，その理由を高齢化としている（各酒造からの聞き取り）．このことから越後杜氏集団の衰退の実態を見ることができる．なお，IN酒造に関しては酒質の変化を求めて南部杜氏集団から能登杜氏集団に変更している．

つぎに現状を見ていく．いわゆる蔵人を呼んでいる企業は現在12社中８社であり，それに対してKB酒造，O酒造，KG酒造，KM酒造の４社は現在，外部からの蔵人には依存せずに，完全に自社従業員による清酒造りをおこなっている．な

**第４表**　神奈川県における清酒製造業者の従業員

| 常用 | 企業 | 常用平均年齢 | 蔵人 | 蔵人平均年齢 | 蔵人の出身地 | 以前呼んでいた蔵人 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| KB 酒造 | 男１女３ | 30 | 0 | × | × | 南部 |
| S 酒造 | 男１女１ | 55 | 2 | 70 | 南部 | 南部 |
| O 酒造 | 男２ | 30 | 0 | × | × | 越後（柏崎） |
| I 酒造 | 男５女１ | 35 | 1 | 55 | 南部 | 南部 |
| KG 酒造 | 男９女４ | 34 | 0 | × | × | 越後（東頸城） |
| KK 醸造 | 男５女１ | 46 | 5 | 62 | 越後（東頸城） | 越後（東頸城） |
| IS 醸造 | 男２女２ | 40 | 4 | ? | 南部 | 越後 |
| IN 酒造 | 男６女２ | 30 | 3 | 67 | 能登 | 南部←越後 |
| NK 酒造 | 男２女３ | 55 | 3 | 60 | 南部 | 越後（東頸城） |
| KW 酒造 | 男２女０ | 40 | 3～4 | 60 | 南部 | 越後 |
| KN 酒造 | 男９女２ | 42 | 1 | ? | 越後（長岡） | 越後（長岡） |
| KM 酒造 | 男５女２ | 31 | 0 | × | × | × |

（資料：聞き取り調査により筆者作成）

かでもKM酒造は創業以来，自社従業員による清酒造りをしている．また，蔵人を呼んでいるS酒造，Ｉ酒造，KK醸造，IS醸造，IN酒造，NK酒造，KW酒造，KN酒造の８社中，蔵人を呼んでいるものの，従業員が主な製造に関する仕事をおこない，補佐的な存在として呼んでいる企業がS酒造，Ｉ酒造，NK酒造の３社ある．Ｉ酒造では毎年蔵人を呼ぶ人数を減らしており，杜氏は自社の従業員である．

また，蔵人と一緒に従業員が清酒造りをおこなっている企業がKK醸造，KN酒造，IN酒造，KW酒造の４社あり，このなかでも近い将来，蔵人を呼ばずに従業員での製造をおこなうとしている企業が，KK醸造とIN酒造の２社である．KK醸造ではすでに杜氏補佐としての従業員がおり，蔵人はあくまでも自社従業員の勉強のために呼んでいる状況にある．なお，IN酒造では2010年からは従業員で製造していきたいという発言があった．KN酒造，KW酒造は一緒に清酒造りをおこなうことで蔵人の技術をしっかりと伝承できる環境にある．したがって，12社中11社は従業員が今後中心になって清酒造りをおこなっていくことが明らかになった．

残る１社のIS醸造は現在，どちらかというと製造は蔵人に頼っている．IS醸造が呼んでいる蔵人は南部杜氏集団であるが，「南部杜氏組合はしっかりしているので労働力では心配していない」(IS醸造)といった発言が聞かれた．しかし，そのいっぽうで「ゆくゆくは従業員での清酒造りにしていかなければならないとは思う」(IS醸造)という発言も聞かれた．

つぎに従業員の平均年齢についてみていく(第４表)．全体として従業員の平均年齢は低いといえる．特に完全に従業員による清酒造りをおこなっているKB酒造，O酒造，KG酒造，KM酒造の４社は平均年齢が30代前半である．またＩ酒造，IN酒造も平均年齢が30歳代であり，この２社もほぼ従業員での清酒造りをおこなっている．したがって，６社が30歳代の従業員を中心に清酒造りをおこなっており，蔵人の高齢化の進展を従業員による清酒造りによって解決しているといえる．さらに，平均年齢が40歳代の企業はKK醸造，IS醸造，KW酒造，KN酒造の４社であり，KK醸造では杜氏補佐の従業員が35歳と若い．

ここで問題なのが平均年齢50歳代であるS酒造，NK酒造の２社であるが，S酒造は34歳の息子が会長の跡を継ぐことになっており，これから若返りがおこなわれていかれるであろう．NK酒造に関しては人材の部分で困っている．しかし，「年ごとに若い人が入ってくるが根付かない」(NK酒造)という発言から，若い人材は入ってきているので，あとはどのようにして根付かせるかが課題である．

このように，神奈川県における清酒製造業者は

杜氏集団の減少や高齢化の影響を受けながらも，現在は従業員による清酒造りによって，これらの問題を解決しつつある．また，酒造技術では，神奈川県のある小売業者からは，「年々向上している．特にKB酒造は若い蔵元の勢いがある」という発言も聞かれた.今後の課題としては，KB酒造，O酒造では清酒造りの期間中にアルバイトを雇っての清酒造りをおこなっているが，酒質は向上しており，さらなる人材確保があげられる．

## 6．酒質と製造方法

清酒における酒質は各清酒製造業者により異なり，他の清酒との差別化をはかる一番の要素といえる．第５表は聞き取り調査による酒質と清酒の製造方法に関してまとめたものである．

これによると，神奈川県の清酒の甘辛度は全体的に辛口の傾向がある．辛口がS酒造，O酒造，Ｉ酒造，KG酒造，IS醸造，NK酒造，KW酒造，KN酒造，KM酒造の９社，やや辛口がKB酒造，KK醸造の２社，甘口がIN酒造の１社である．また，濃淡度では濃厚寄りがO酒造，IS醸造，IN酒造，KN酒造の４社，淡麗寄りがS酒造，Ｉ酒造，NK酒造，KM酒造の４社，中ぐらいがKB酒造，KG酒造，KK醸造，KW酒造の４社であった．この結果，神奈川県における清酒の酒質の傾向としては淡麗辛口寄りではあるものの，全体としては辛口の中で濃淡度を選択している．IN酒造だけが甘口であるが，これも企業の方針から時代に合わせた選択をしていることが伺える．

**第５表**　神奈川県における清酒の酒質と製造方法

| 企業 | 設備 | 期間 | 桶売り | 桶買い | 甘辛度 | 濃淡度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| KB 酒造 | 伝統 | 季節 10-3 | なし | なし | やや辛口 | 中 |
| S 酒造 | 伝統 | 季節 11-2 | なし | なし | 辛口 | 淡 |
| O 酒造 | 伝統 | 季節 11-3 | なし | なし | 辛口 | 濃 |
| I 酒造 | 伝統 | 季節 11-3 | なし | なし | 辛口 | 淡 |
| KG 酒造 | 近･伝統 | 季節 10-3 | なし | なし | 辛口 | 中 |
| KK 醸造 | 伝統 | 季節 11-4 | なし | なし | やや辛口 | 中 |
| IS 醸造 | 伝統 | 季節 11-3 | なし | なし | 辛口 | 濃 |
| IN 酒造 | 伝統 | 季節 11-3 | なし | なし | 甘 | 濃 |
| NK 酒造 | 伝統 | 季節 11-3 | なし | なし | 辛口 | 淡 |
| KW 酒造 | 伝統 | 季節 11-3 | なし | なし | 辛口 | 中 |
| KN 酒造 | 伝統 | 季節 11-3 | なし | なし | 辛口 | 濃 |
| KM 酒造 | 伝統 | 季節 10-3 | なし | 一部 | 辛口 | 淡 |

（資料：聞き取り調査により筆者作成）

桶取引についてはKM酒造のみ桶買いをしているが，いわゆる普通酒のみの一部分でしかない（第５表）．よって，神奈川県における清酒製造業は桶取引に依存はしていないことが明らかになった．また，いわゆる三増酒を製造している企業は見受けられなかった．むしろ，純米酒や吟醸酒を主に販売している企業が多く，「普通酒では灘，伏見の大手企業には勝てないから純米酒や吟醸酒を主に販売している.」（KG酒造）という発言などからも，パック酒やカップ酒に関しては製造をしていない企業がほとんどであった[13]．

さらに，神奈川県の清酒造りの期間は聞き取り調査をおこなった12社すべてが，冬季のみの季節蔵であり，製造設備に関しては一部近代的設備を備えているのはKG酒造のみで，他のすべての企業が伝統的設備での製造をおこなっている（第５表）[14]．

## 7．生産量と市場構成

神奈川県における各清酒製造業の生産量と市場構成を，生産量が多い順にまとめたものが第６表である．なお，生産量は聞き取り調査で各企業が表示した数値を載せており，石数で表示した企業に関しては石数を単純にklに直している．

生産量はKK醸造の216klがもっとも多く，つぎにKN酒造，KG酒造が150klと続く．

以降，Ｉ酒造，KW酒造，IS醸造，IN酒造，KM酒造，NK酒造，O酒造，KB酒造，S酒造と続くが，生産量からみる限り，神奈川県の清酒製造業者は現在も零細企業の域を出ていない．しかし，総生産量では1,215klと2006B.Y.の989klと比べると増加しており，清酒の消費量が全国で大きく落ち込んでいる中からみると異例のことである．また，生産量からみる企業立地は，上位４企業が秦野市，海老名市，厚木市，伊勢原市域の農村部に位置している．続いて足柄上郡に立地しているKW酒造，IS醸造，IN酒造の３社，茅ヶ崎市のKM酒造，足柄上郡のNK酒造の順となっており，山間部に立地している愛甲郡のO酒造，津久井郡のKB酒造，S酒造は生産量がもっとも少なくなっ

**第６表**　神奈川県における清酒の生産量と市場構成

| 企業名 | 所在地 | 現在の生産量 | 市場構成 |
|---|---|---|---|
| KK 醸造 | 伊勢原市 | 216KL | 70% が地元の問屋・30% が地元の酒屋 |
| KN 酒造 | 秦野市 | 150KL | 県内のみ・同市内 50%・市外 50%，うち６割問屋，４割小売 |
| KG 酒造 | 厚木市 | 150KL | 県内 90%・主に卸売，酒屋，小売・県外は 5% |
| Ｉ酒造 | 海老名市 | 117KL | 直売・県内小売・県外小売・百貨店の順に多い |
| KW 酒造 | 足柄上郡山北町 | 108KL | 60%％県内・40%％県外・地元の問屋が少し，全国各地の酒屋に |
| IS 醸造 | 足柄上郡大井町 | 90KL | 98% 県内・箱根，小田原を中心に酒屋・小売はなし |
| IN 酒造 | 足柄上郡大井町 | 90KL | 地元 98%・箱根の酒屋中心・地元の問屋も |
| KM 酒造 | 茅ヶ崎市 | 90KL | 地酒専門店・一部問屋・全国・消費者ほぼなし |
| NK 酒造 | 足柄上郡松田町 | 72KL | 90% 県内・問屋・小売・デパート・直売 20%・10% 以下，県外 |
| LO 酒造 | 愛甲郡 | 54KL | 県内 85%・主に厚木，相模原・一部全国 |
| KB 酒造 | 津久井郡 | 42KL | ３０％直売・７０％東京，神奈川の酒屋のみ・一部全国 |
| LS 酒造 | 津久井郡 | 36KL | 郡内で 70%・県内小売・卸売は少し・東京にも一部 |

（資料：聞き取り調査により筆者作成）

ている．

市場構成では県内のみの販売をおこなっているKN酒造を筆頭に，KG酒造，IS醸造，IN酒造，NK酒造の４社は県内に90%以上販売しており，さらにO酒造，S酒造，KK醸造，KW酒造の４社も半数以上が県内での販売である．また，正確な数字はないもののＩ酒造も県内での販売数が高い.KM酒造では地酒専門店を中心にして，県内市場を確保している.KB酒造は30%が直売，残りの70%は東京と県内への販売なので，割合からみても県内への販売が多いといえよう．

もっとも，県内での販売といっても川崎市や横浜市といった人口の多い地域ではなく，各企業周辺の地域に留まっているのが実際である．特にKN酒造では所在地の秦野市内だけで半分を販売しており，IS醸造，IN酒造は箱根，小田原を中心に販売を展開している．O酒造も所在地近くの相模原，厚木を中心に市場展開しており，S酒造は所在地の津久井郡内だけで70%を販売している．KG酒造，NK酒造も同様のことがいえる．KK醸造に関しては問屋を中心に販売しているが，近場の市町村での販売になっている．Ｉ酒造，KW酒造，KM酒造，KB酒造の４社は比較的県内でも横浜市や川崎市に販売網を持っている．一方，小売よりも問屋を中心に販売しているのはKK醸造，KN酒造であり，残りの10社は小売中心で一部問屋を使用している．

したがって，神奈川県の清酒における市場構成としては，企業周辺の地区単位での構成が多く，県内でも販売している地域がある程度限られている．また，県外への販売は一部分だけであり，県外への販売をおこなっていない企業もみられる．では，全国の清酒消費量が落ちている現在，神奈川県における清酒製造業者はどのような企業戦略をおこなっているのか．市場構成から見ると，S酒造，IS醸造，IN酒造，KK醸造，NK酒造は神奈川県だからこそ出来るやり方といっていいだろう．各市町村で人口が多く，周辺地域だけで十分消費できる環境がある．さらに箱根という観光地を市場として持つことで消費拡大も可能となっている．

一方で，KB酒造，O酒造，KW酒造，KM酒造は県内各地の，設備がしっかりし，対面販売をしながら，自分達が造る清酒のこだわりを伝えてもらえる小売業者を中心に卸している．従って，卸売をほとんど使うことなく小売業者との絆を強めつつ，全国の地酒専門店にも卸している．

特にKW酒造は20年前から小売業者を選び，純米酒にこだわり，着実に地元にも足を固め，現在では雑誌にも取り上げられる程の，全国でも有数な酒造になった．

また，Ｉ酒造は地産地消にこだわり，米から清酒造りの過程が見えるようにしたうえで，造る清酒はすべて純米酒というこだわりをもっており，

米の収穫には地元の人々も参加でき，地元の人々にアピールしている．さらに，兼業事業を有効に使用している企業もあり，KG酒造は清酒造りを見てもらおうと冬場は積極的に酒蔵見学をおこない，直営のレストランを経営する中で自分達の酒をアピールしている．KN酒造は市内に50%を卸して地元密着型である傍ら，麹菌に音楽を聞かせて造る音楽醸造酒「モーツァルト」を看板に販売している．

このように神奈川県の清酒製造業者は市場構成や兼業事業をうまく利用し，自社の清酒を販売していると言えよう．

## Ⅳ　おわりに

以上，本稿では神奈川県における清酒製造業の実態を述べてきた.その結果，明らかになった点は以下の通りである．

第一に，神奈川県における清酒製造業は現在15社であるが，生産量は零細規模であり，各企業間での生産量に大きな差はあまりない．桶取引の実態では調査をおこなった１社を除く11社がおこなっておらず，桶買いをおこなっている１社も普通酒のみであることから，それぞれの企業が自社製造の清酒を販売していることが確認された．三増酒製造の実態調査はおこなってはいないが，零細企業である神奈川県の清酒製造業は三増酒や普通酒では大手企業に勝てないのは明白なことであり，聞き取り調査では純米酒や吟醸酒などの指定名称酒を丁寧に製造している企業しか見られなかったことから，三増酒の製造はないものと思われる．

第二に，創業者は地主から成り立っており，かつては越後杜氏集団と南部杜氏集団に支えられてきたが，現在は各清酒製造業者の若い蔵元や従業員がその酒造技術を受け継いで支えている．

第三に，販売先は主に県内であるが，県西部地域が主な販売先である．なお，全国にも販売はしているが，ごく一部である.販売先は設備がしっかりし，対面販売しながら自分達が造る清酒のこだわりを伝えてもらえる小売業者を中心に卸している．

神奈川県における清酒製造業は従来の研究課題である杜氏集団の減少からなる人材不足や三増酒の製造，桶取引による自社製造酒の製造販売を克服し，市場構成や兼業事業をうまく利用した特徴をもっている．一部の地域で消費できる環境や，箱根を中心とした市場構成は神奈川県という場所でしかできないことであろう．

しかし，清酒の販売が一部の地域に限られているのは生産量の増加を見込めないことでもある．神奈川県では箱根や県西部が主な市場になっており，いくら人口が多くても限られた地域では限界がみえており，企業間での摩擦が起きてしまう事態になりかねない．また，神奈川県の清酒の知名度が低い理由もここにあり，神奈川県内ですら一部地域しか販売されておらず，県東部地域では神奈川県産の清酒の知名度は低い．また，近隣の他県や全国の知名度からいっても低い．この知名度の低さは今後の流通に響いてくることが推測される．

よって，今後は生産量の増加と知名度の向上を目的に県内での市場を県東部地域にも広げる必要性があり，特に川崎や横浜といった大都市地域に販売することによって知名度は格段に上がるだろう．また，近隣他都県にも流通していくことが，今後の生産量拡大に必要と思われる．

県内や県外に販売を広げることで他県からの清酒と比較されるが，負けないだけの味が神奈川県の清酒にはあるはずである．また，他県の清酒に負けないような酒造技術の向上も必要不可欠である．

本稿は神奈川県における清酒製造業の実態を明らかにし，考察してきた．今後もこの様な全国各地の小規模産地の解明が必要であり，神奈川県の清酒製造業者の様に努力をしている清酒製造業者にスポットを当てていくことが必要である．このことが清酒業界低迷の打開策に何かしらのヒントを与えると思われる．

**謝　辞**

本稿の作成あたり，忙しい中，聞き取り調査に快く

応じて下さり，大変お世話になった神奈川県の各清酒製造業者の皆様，小売店舗の皆様に厚く御礼申し上げます．また，資料の提供をしてくださいました日本杜氏中央会の皆様に深く感謝いたします．

最後になりましたが，本稿の作成にあたりご指導を頂きました伊藤達也先生に感謝申し上げます．

## 注　記

1）1940年に制定された分類制度で，清酒をアルコール度と酒質などから特級，一級，二級，三級，四級，五級と分類する制度であったが，蔵元からの相次ぐ批判があり廃止され，現在の特定名称に分類された．

2）規制緩和推進3カ年計画により，2001年に距離基準，2003年には人口基準が廃止された．

3）残りの３社については，２社が製造を中止，１社が桶買い専門であることを聞き取り調査中に確認したため調査はおこなわなかった．

4）2008B.Y.以降は不明であり，国税庁に問い合わせしたところ調査は実施しているが集計中とのことである．

5）1686年に，下総佐倉藩主であった大久保忠朝が入封した．大久保忠朝は小田原藩最初の藩主であった大久保忠世の５代目にあたり，当時は幕府の老中であった．以後は幕末・明治初頭まで大久保氏の支配が10代続いた．NK酒造の創業は1825年で，当時の藩主は大久保忠真であった．

6）NK酒造より聞き取り．

7）瀬戸(1977)によると1977年の時点では24社の企業が存在していた．また，聞き取り調査中にも県内には24社あったことを何度も聞いた．

8）なお，聞き取り調査では近江商人が創業者の酒造も存在していたという発言を聞いたが，詳細は不明である．

9）同業種や他業種などが撤退した店舗跡地を利用して出店すること．設備を残したままの物件であるため，出店費用が安く済む．

10）また，「水は箱根水系，丹沢水系，多摩水系の３つを神奈川県の各酒蔵は使っていた．」(S酒造)というように，昔は丹沢山系の伏流水以外の水源を使う清酒製造業者が存在し，現存する清酒製造業では小田原市のAI酒造が箱根水系を使用していた．

11）大井町ホームページによると，大井町内の水道水は地下100mから汲んでいる．

12）なお，IN酒造は25年間，南部杜氏集団を呼んでいるが，それ以前は越後杜氏集団であったので越後杜氏集団の方に含めた．

13）ただ，聞き取りにおいて詳しい内容を聞いていないので断定はできない．

14）なお，伝統的設備と近代的設備の明確な基準はなく，伝統的な工程の一部分には近代的設備が設置されている場合が多い．また製造する清酒の分類によって，そうした設備を使わない場合と使う場合がある．したがって，本調査では工程の中でも麹造りの部分を重要視しつつ，麹を昔ながらの手造りによっておこない，および伝統的製造方法をとっているかによって近代的か伝統的かを区別した．

## 参　考　文　献

相原精次(1994)『かながわの酒－地酒「神奈川物語」の誕生』．彩流社，221p.

青木隆浩(1998)「近代における埼玉県清酒業者の立地選択と酒造技術」．地学雑誌，107巻5号，660-673.

伊藤康雄(1995)「わが国における清酒製造業の現状と課題―岐阜県下の清酒製造業の事例調査を通じて－」．中京商学論叢，42号，1-31.

上野敏彦(2006)『戦う純米酒－神亀ひこ孫物語』．平凡社，272p.

神奈川県県民部県史編集室(1981)『神奈川県史　通史編6　近代・現代(3)』．神奈川県.

神奈川県県民部県史編集室(1983)『神奈川県史　通史編3，近世(2)』．神奈川県.

金尾総一郎(2007)「県内清酒製造業の現状と今後の可能性」．カレントひろしま，260号，2-23.

木原高治(2002)「清酒製造業における雇用構造の変化と生産効率－関東甲信越地域における酒造要員賃金実態調査を手がかりにして－」．東京農大農学集報，47号，231-242.

工藤陽明・大嶽幸彦(1993)「新潟県上越地方における清酒製造業の実態」．兵庫地理，38号，69-81.

櫻井民雄(2008)「県内市場のシェア拡大が課題の広島清酒」．酒類食品統計月報1号，49-51.

桜井宏年(1980)「酒造出稼ぎ労働力の逼迫と清酒製造業資本の労務構造の変化」．農村研究，50号，272-289.

清水龍瑩(1985)「伝統的，中堅・中小企業の企業経営と成長要因－清酒製造企業延2,383社の実態調査を中心にして－」．三田商学研究，28巻4号，1-29.

杉本正博(2003)「品質と個性化に挑戦する高知の清酒製造業－高知県清酒製造業の現状と課題－」．四銀経

営情報，71号，1-29.
瀬戸崎 雄(1977)「神奈川の酒ーその歴史を中心にー」. 神奈川文化，No. 260，1-9.
高木　亨(1997)「出荷地域からみた長岡地域における清酒醸造業の性格」. 日本地理学会発表要旨集，52号，146-147.
高村雅憲(2002)「青森県の清酒製造業」. 月刊れぢおん青森，24号，2-19.
外池良三(2005)『世界の酒日本の酒ものしり辞典』. 東京堂出版，289p.
藤原隆男(1999)『近代日本酒造業史』. ミネルヴァ書房，462p.
西方勝彦(2002)「県内清酒製造業の特色」. ホクギンクォータリー21，132号，8-23.
西村　宰(2008)「岡山県清酒製造業の現状と課題」. 岡山経済，31号，13-21.
野間重光(2006)「国民酒革命と清酒産地の変容」. 九州経済調査月報，60号，3-12.
八久保厚志(1993)「清酒業の企業空間再編」. 137-151山川・柳井編『企業空間とネットワーク』. 大明堂.
八久保厚志(1994)「大正期における会津酒造業の市場展開—東京市場進出過程を中心にー」. 経済地理学年報，40巻第2号，35-51.
堀　忠史(2007)「県を上げて需要振興に取り組む新潟清酒」. 酒類食品統計月報，11号，17-23.
堀　忠史(2008)「厳しさ増す新潟清酒，一方で依然高い人気も」. 酒類食品統計月報，11号，74-79.
松田松男(1978)「我が国における酒造出稼ぎの需給分布図とその変化」. 地理学評論，51巻11号，804-813.
松田松男(1981)「丹波・篠山町における酒造業労働力の変容」. 地理学評論，54巻8号，405-422.
松田松男(1989)「最近における酒造業の地域構造に関する若干の考察」. 経済地理学年報，35巻3号，65-77.
松田松男(1988)「県内酒造業における「協同銘柄事業」と流通」. 地理紀要，No.5，5-12.
村上　誠(1979)「広島県における酒造業地域の形成と変貌」. 広島大学総合科学部紀要，5巻，1-28.
山同敦子(2005)『愛と情熱の日本酒』. ダイアモンド社，301p.
山成健治(1998)『かながわの地酒』. 神奈川新聞社(かもめ文庫)，180p.
山本　茂(1983)「埼玉県酒業の地理的分析—地場産業研究(1)」地理学集誌3号，1-20.
柚木学(1998)『酒造経済史の研究』. 有斐閣，317p.
柚木　学(2005)『酒造りの歴史』. 雄山閣出版，365p.
吉田 弘一(1992)「三重県産清酒の現状と展望」. 松阪大学地域社会研究所報，4号，31-41.